

考古学的社会変成過程観察モデル

酒 井 龍 一

はじめに

本稿は、社会変化を考古学的に研究する立場 (Hill ed. 『Explanation of Prehistoric Change』 1977) から、当面の作業仮説として、『社会構造変成過程に発生する諸現象の観察視点を提示するのが目的である。

第一章 社会変遷

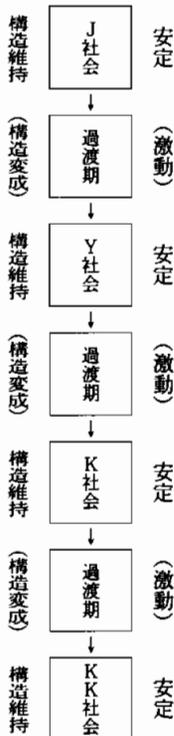
第一節 前提

例えば、次の社会変遷が観察できたとする。

狩猟採集を生業基盤とするJ社会が何千年間も存続してきたが、ある時点から急変し始めた。紆余曲折の末、水稲農耕を生業基盤とするY社会が新たに形成された。Y社会も何百年間は

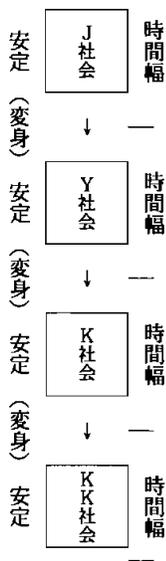
安定したが再び急変を始め、やがて巨大前方後円墳の造営を根幹とするK社会が出現した。この社会も何百年間は安定していたが、古墳造営を中止する等して激動を始めた。そして強力な人民管理機構たる都城造営を根幹とし、古代国家と評価できるKK社会が出現するに至った。

かかる変遷は、図式的には、各社会の「構造維持過程」と「構造変成過程」の繰り返しと認識できる(第1図)。また、様々なマクロ変化が一齐に発生する構造変成過程の時代は、既存社会から新生社会への「過渡期」(激動の社会)とも理解できよう。



第二節 一般モデル

以上の認識に対し、時代区分に関する一般モデルでは、各境目に格別な過渡期を設定しないのが原則である(第2図)。これだと理屈上、各社会は瞬時に変身する。となると、一般モデルに立脚する限り、各変成過程を実際に観察したり積極的に究明すべき余地と必然性は生じない。この観点では、社会変化研究における一般モデルの存在意義は小さい。従って、有効な新モデルが必要となる。



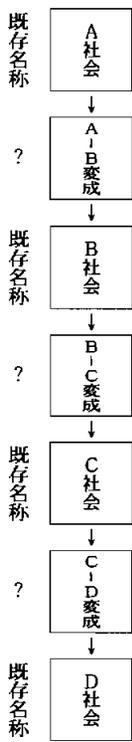
第三節 小林モデル

考古学以外の領域でも、小林多加士(『文明史の構造』『文明の歴史学』一九九一年)らのように、明確に過渡期を設定し社会変遷を認識する実例がある。この存在は心強い。中国文明の変遷に関する小林モデルの一部を紹介しておく(第3図)。



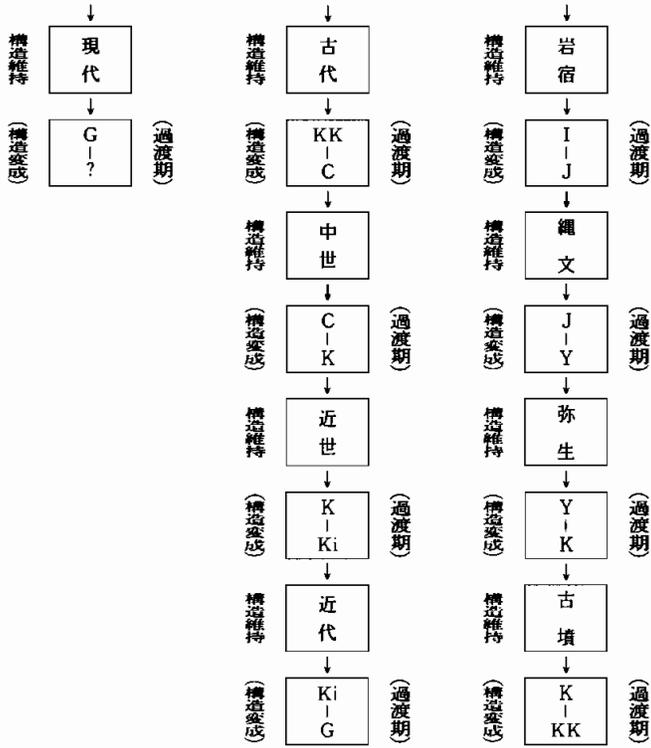
第四節 時代名称

日本列島中枢部の時代区分には、「旧石器(岩宿)・縄文・弥生・古墳時代」、あるいは「古代・中世・近世・近代・現代」等の名称が既存する。社会変遷一般を、各種社会の構造維持と構造変成の繰り返しとみる新モデルでは、前者に既存名称を拝借できても、後者には新名称を要する。そこで、前後社会名の頭文字によって「A-B変成(A社会からB社会の変成過程)」等の命名法をとる(第4図)。



第五節 酒井モデル

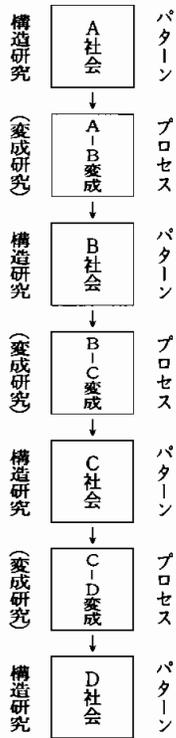
一般的な時代区分を踏まながら、新たに過渡期概念を導入すると、上記の社会変遷全体は次のようになる（「岩宿時代」の用語は佐原真らによる）。



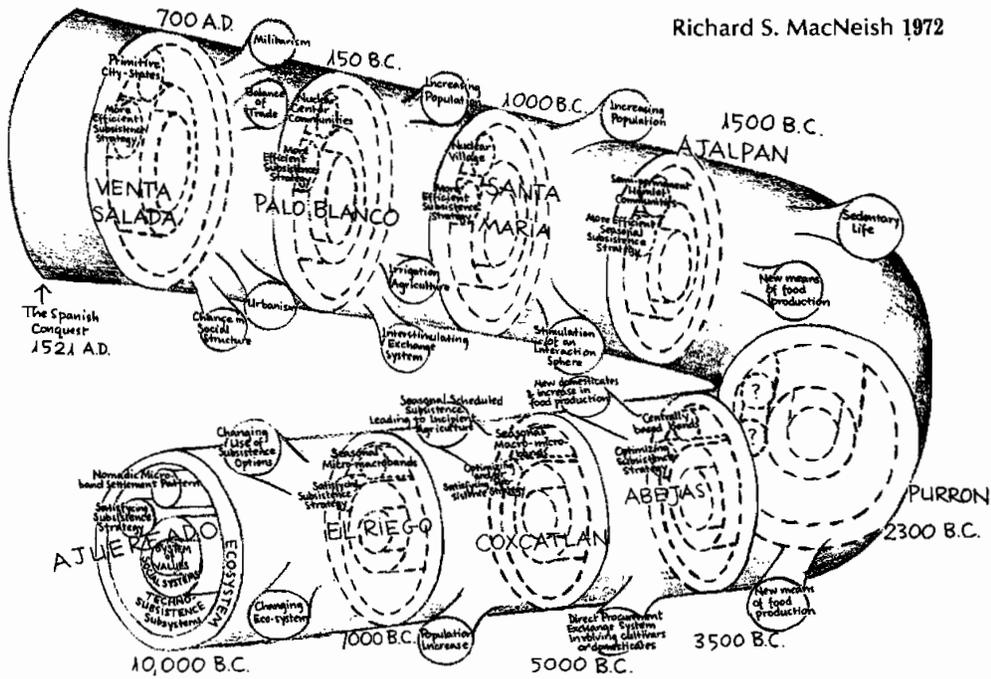
第二章 研究階層

第一節 構造研究・変化研究

社会研究の両輪である構造研究と変化研究では、基本的に別個の戦略（認識・視点・観察対象・分析法・評価・モデル等）が必要である。前者は主に関係パターン（例えば、セトルメントパターン等）、後者は主に変化プロセス（例えばモノ・コトの発生・消滅プロセス等）の究明を重視する。また主たる観察対象は、前者が構造維持過程、後者が構造変成過程（過渡期・激動の時代）となる（第5図）。



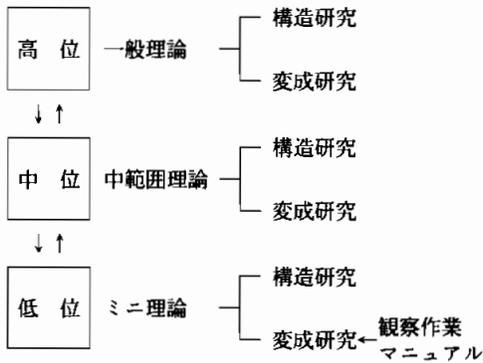
次図にマクネッシュによるセトルメントパターンと社会変遷に関するモデルを提示しておく。



A systemic model of cultural change in prehistoric Tehuacan.

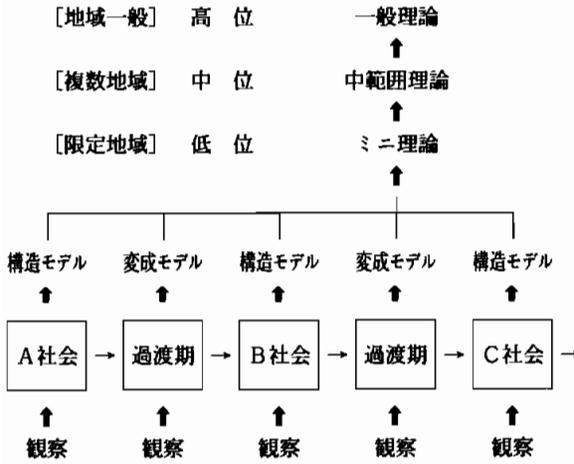
第二節 3階層

研究一般は構築されるべき理論階層に従って、低位・中位・高位の三階層に区別される (Trigger 『A History of Archaeological Thought』 1991, 安齋正人 『理論考古学』 一九九四年)。低位はミニ理論、中位は中範囲理論 (マートン・森好夫訳 『現代社会学体系 13 社会学論と機能分析』 一九七二年 Binford 『For Theory Building in Archaeology』 1977, 阿子島香 『ミドルレンジセオリー』 『考古学論叢』 一九八三年)、そして高位は一般理論を構築すべき階層である (第6図)。本稿は、低位研究の前提となる「観察作業マニュアル」として機能する。



第三節 低位研究

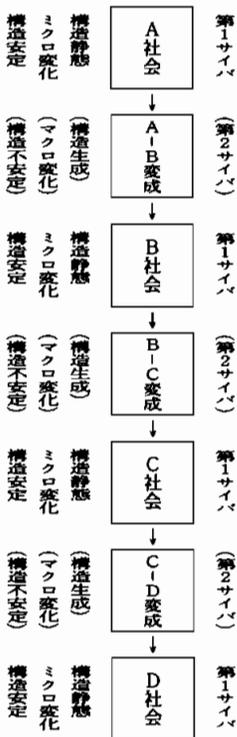
そもそも低位研究は、各研究者が社会変遷を身をもって体感できる程度の限定地域（例えば、Willey『Prehistoric Settlement Patterns in the Viru Valley』1953、MacNeish et al. eds『The Prehistory of the Tehuacan Valley 5』1972.）の空間範囲で実施するのが基本である。その作業は、考古学的実情の観察・観察結果のモデル化・諸モデルのミニ理論化等となる（第7図）。本稿は、過渡期一般に発生する諸現象の観察に関係する。



第三章 一般システム理論等

第一節 サイバネティクス

維持過程と変成過程の概念は、『一般システム理論』(Maruyama Processes)『American Scientist 51』1963)による「第1サイバネティクス」と「第2サイバネティクス」や、バックレー(『一般社会システム論』新睦人・中野秀一郎訳 一九八〇年)による「構造静態」と「構造生成」に対応する(第8図)。また、変化一般には、「システム内側で生じ、システム自体は不変の変化」と「システム自体の変化」の二タイプがある(ワッラウィック他『変化の原理』長谷川啓三訳 一九九二年)。前者はマイクロ変化、後者はマクロ変化である。



第二節 カタストロフ

社会変化一般を、漸次的変化でなく、全くの構造変成と認識すれば、以下のような「ベクトル場」と「カタストロフ」(ルネ・トム・宇敷・佐和『形態と構造』一九七七年)的概念も援用できる(第8図)。ただし、あくまで比喩的な程度にとどまる。

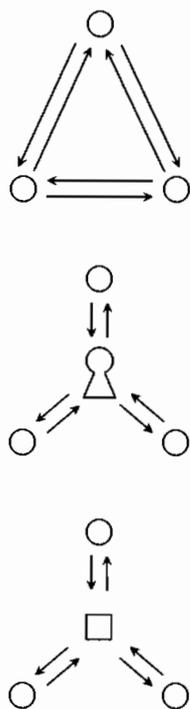
安定した社会状態が、一定期間、持続するということは、「歴史」がベクトル場の空間内の、構造安定なものから成る領域を通過しつつあることを意味する。一つの安定した社会状態から、別の安定した社会状態へ激動する時点において、構造安定なベクトル場の位相型が、とつじよ変容するのである。このとき、「歴史」は、必然的に、構造安定なベクトル場から成る集団どうしを区別する「境界」を通過するのである。このような境界線上にあるベクトル場は、構造不安定なベクトル場である。かくして、現象における「カタストロフ」を解析する鍵は、ベクトル場の空間内にある、構造不安定なベクトル場の形態いかににかかってくるのである(同上：59-60頁)。

第三節 ベクトル場

「ベクトル場」概念を用いて社会状態を類比する場合、ベクトル場

が集合する点は「アトラクタ」、離脱する点は「リペロ」と呼ばれる(同上)。この観点から、以下に3社会を例示する(第9図)。

Y社会は、地域の諸集落が集合し、その間を人間・生産物・情報が均一に往来する等質的な構成体であった。この場合、各集落はリペロとアトラクタを兼務し、ベクトルは各集落に相互方向に向かう。次のK社会では、各所に巨大墳墓が造営され、そこに広範な地域から労働力が集中する階層的な構成体であった。この場合、ベクトルは有事的に、リペロたる諸集落からアトラクタたる造営地に向かう。更に新たなKK社会は、地域を大きく越えた広範囲な諸集落全体から労働力と生産物等が、社会管理機構の都城に集中する階級的な社会構成体であった。この場合、全集落がリペロとして固定され、全ベクトルは恒常的にアトラクタたる都城に集中する。



第四節 クレオド

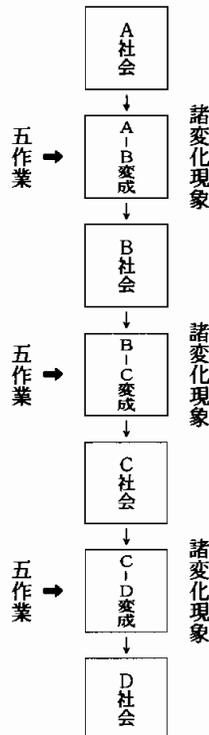
革命というカラストロフは、単発的に勃発するのではなく、その前後に、いくつかの必然的でき事が契起的に付随して生じると考えられる。つまり、複数個のカラストロフがひとかたまりになって、全体全体として必然的に並んでいる。そういう歴史の怪筋のことを、トムは「クレオド」と名づけた(同上63-64頁)。

この認識を援用すると、上記3事例(第9図)は、Y社会として安定していたベクトル場の状態から、K社会の状態を経て、KK社会として安定する状態に移行すべく、一連の現象がしかるべきクレオドに沿って発生したと理解できる。

第五節 イニシアルキック

Development of a city in an agricultural plain may be understood with the same principle. At the beginning, a large plain is entirely homogeneous as to its potentiality for agriculture. By some chance an ambitious farmer opens a farm at a spot on it. This is the initial kick. (M. Magoroh 1963, p.166)

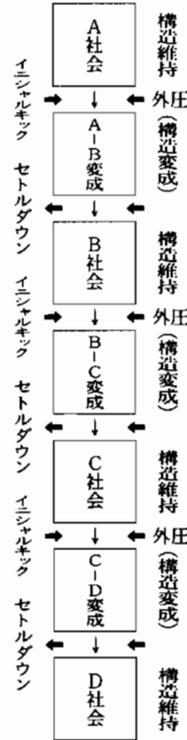
過渡期に発生する諸現象の中から、いわば根幹を特定する作業が不可欠である。根幹の「イニシャルキック」(Maruyama 1963)が、新社会生成の実質的な開始点となる。だが、何を根幹と認識するかは各観察者で異なる。判断が異なると観察対象・評価・モデル等は異なってくる(例えば、弥生社会生成における「稲作農耕」、古墳社会生成における「巨大前方後円墳造営」、古代国家社会生成における「都城造営」等は、各根幹としての共通認識となっている)。ここでは、諸現象観察・時間的特定・発生順序把握・根幹抽出・イニシャルキック確認等の五作業を要する(第10図)。



第六節 外庄・対応

一般的な認識では、第1サイバにより構造維持過程の構成体が、しかるべき外庄を受けると、それに対応すべく根幹がある方向にイニシアルキックする。それを契機に一連のマクロ変化が発生し始める。同時に第2サイバによる構造変成過程に転換し、不安定で変化しやすい状

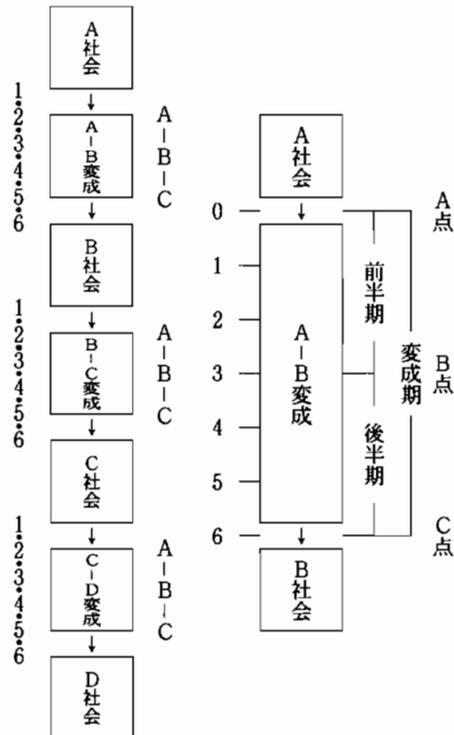
態となる。そして外圧に対応できる状態にセトルダウンした時点で、再び第1サイバが機能する新たな構成体が出現する(第11図)。第5節で提示した作業に加えて、外圧・イニシャルキック・セトルダウンの実情を追求することも重要な作業である。



第三章 社会構造変成過程

第一節 基本枠組

社会構造変成は、A点→A過程→B点→B過程→C点を経過し実現する(第13図)。開始A点は、根幹のイニシャルキックを考古学的に認定し決定する。過程全体は、先行社会の解体A現象が顕著な前半期(A-B点)と、後出社会の形成B現象が顕著な後半期(B-C点)に区分できる。途中に両者の比重が逆転する中間B点が存在する。終了C点は、後出社会の構造維持の根幹のセトルダウンを認定し決定する。



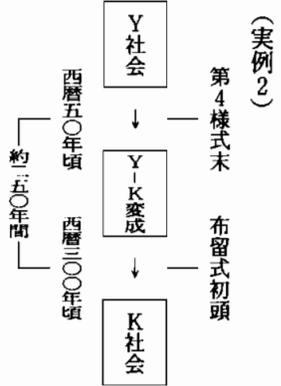
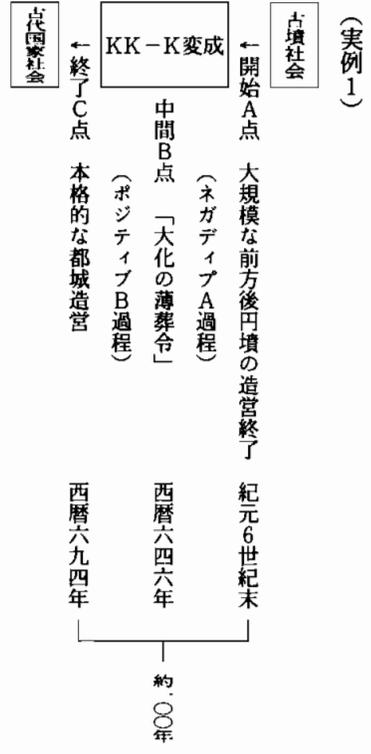
第二節 時間目盛

考古学一般では、時間目盛に土器・石器等の編年区分を用いる。各変成過程毎に、変成全体様式・同前半期様式・同後半期様式の3大目盛、と前半3段階+後半3段階=計6段階の6小目盛を設定するのが合理的であろう(第13図)。

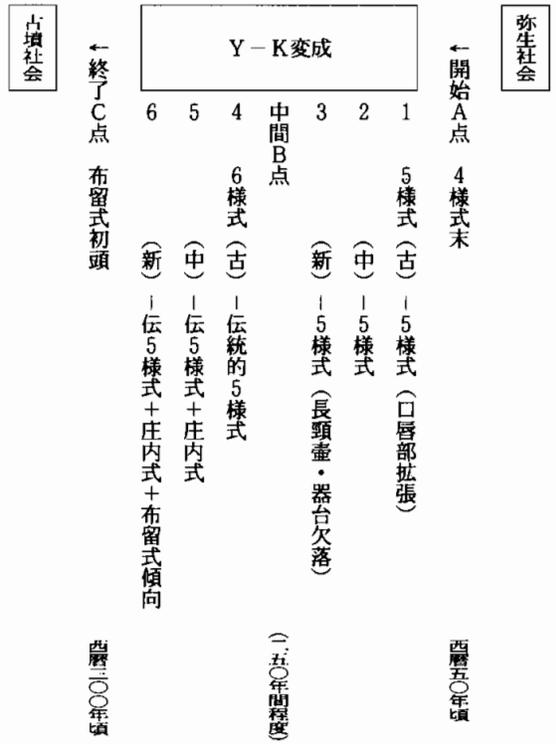
第三節 時間概念

各点・各現象の時間的位置は、相対法・絶対法・暦年法三者で把握すべきである。相対法は編年で型式学的位置、絶対法は科学的算出で時間的位置、暦年法は碑文等で暦年代を導く。世間一般には、三者が

一致・整合するとの錯覚がある。だが、例えば縄文時代の始まりを、紀元前二五〇〇年頃（山内清男）、紀元前八〇〇〇年頃（水野清一・小林行雄）、紀元前一〇〇〇〇年頃（日本史の教科書）、前者より三〇〇〇年程度を減じて補正（年輪年代）等の見解があり、同じ現象に対しても年代観は大きく異なる。考古学では、型式学的位置が基本となる。

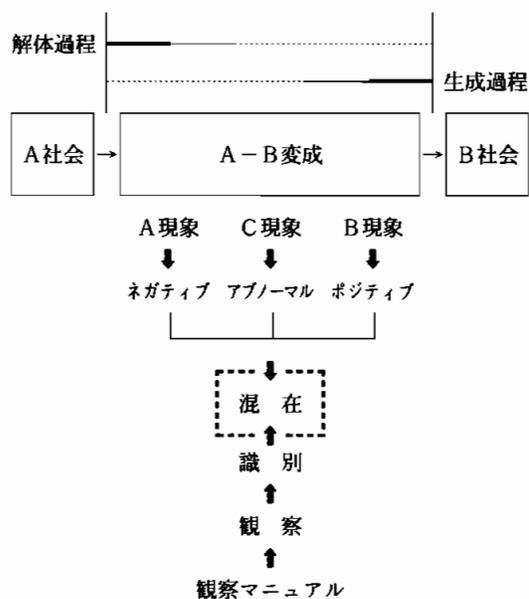


(実例3)



第四節 現象識別

社会変成は、先行社会の解体過程と後出社会の生成過程が表裏一体(変成過程)で進行する。それ故、観察者の眼には、先行社会の解体A現象と後出社会の生成B現象等が混在した状態で発生する。従って、その識別が必要となる。時間経過の点では、理屈上、変成過程の前半期にはA現象、同後半期にはB現象が顕在である。別に、前後の脈絡にそぐわない特異C現象(外圧の対応現象)も発生する(第12図)。



第五節 A・B・C現象

解体A現象は、「解体・衰退・減少・退化・縮小・形骸化・無用化・小形化・失速・廃絶・廃止・消滅」等と評価すべき、先細りⅡネガティブ現象である。生成B現象は、「出現・発生・開始・誕生・形成・繁栄・増加・増大・強化・成長・進化・拡大・一般化」等と評価すべき、先太りⅡポジティブ現象である。特異C現象は、「特異・異常・突発的・逸脱・逆流・ジグザグ・不思議・方向転換・中断・怪奇・意味不明・変異」等と評価すべき、異状Ⅱアブノーマル現象である。

おわりに

以上、社会変化一般を考古学的に研究する立場から、特に社会の「構造変成過程」（過渡期・激動の時代）に発生する諸現象をいかに観察するかの視点を提示した。極めて荒削りであったが、有効な諸点も含まれていよう。先学諸氏の御批判を受けやすく論議を構成している。御批判を願う次第である。多くを学びえた先学に感謝する。